

書道との出会い

「書道の楽しさは、一枚一枚、常に新しい心で書けることです。書くほどに新しい自分が見えてくるんです」と語る富永さん。

書道の楽しさに目覚めたきっかけは小学1年生の時、習字のコンクールに出品したところ入選。大きな賞をもらったわけではないが、家族や周りからほめられ、それが嬉しくて、書き続けた。今日も、新しい自分を求めて筆をとる。

ものづくり・人づくり

富永さんはNPO法人天山ものづくり塾の副理事長として「天山アートフェスタ」の運営にも携わる。

「ものづくりには、ものを大事にする心を持つ『人』を育てることが重要です。」

そのためにまず、子どもの創造力や可能性を信じて、子どもたちの力を引き出してあげることが私たち大人の役割だと思っています」と語る。

「子どもたちがまちづくりに参加すると、小城市に愛情を持つでしょう。それは小城市の賑わいにもつながってきます。そして、小城市から、世界に通じる人材をどんどん輩出していきたいですね」と、ものづくりを通して、小城市の将来にも思いを馳せる。

現在、人づくりの一環として、自宅のアトリエで習字教室も開催している。

更なる挑戦！

富永さんは中国の古い文字を手習いしながら、創作のヒントを得ている。時代を超え伝承されてきた「本物」を目指す。

その本物の一つで、小城市の藩祖鍋島元茂公が大事にした「怒」の心を広めたいと語る。「怒」には女性の口から出てくる言葉は思いやり、優しさ、赦す、という意味が込められている。

今の時代こそ、思いやりの心を大事にしたい。「日本の伝統である筆文化を小城市で広めて行きたいですね。私は練習も兼ねて名刺の名前を手書きにしています。上手下手は気にしなくていいんです。身近なところから筆を使って頂けたらと思います」と語る富永さんの挑戦は小城市の筆人口を増やして、梧竹さんの故郷・小城市を書道特区にする事と情熱を燃やす。

富永さんありがとうございました。

I Love Ogi

第1回



とみなが まさき 富永 正樹 (将暉)さん

プロフィール

1948年小城市生まれ。小城市高校を卒業後、大東文化大学で書道を学ぶ。書家として国内外で個展を開催し、現在は小城市で制作活動を行う。現在、NPO法人天山ものづくり塾の副理事長を務め、新年書初めライブを佐賀城本丸歴史館で行うなど、筆文化の発展に尽力している。60歳。

ギャラリー



富永さんの「怒」 ※1



三里小学校の正門にかけられている手作りの看板。富永さんが書いた文字を全児童が力を合わせて彫った。

中国の習字の手習いに使われた千字文より「治本於農」国治の根本は農業であるという意味が込められている。

